

# 紛争後ソロモン諸島社会における民族間関係の人類学的研究

藤井真一（人間科学研究科 人類学）

## 0. 背景、目的、調査方法

ソロモン諸島国は1999年から2003年にかけて「エスニック・テンション (Ethnic Tension)」と呼ばれる激しい民族間対立<sup>1)</sup>を経験した。2003年7月23日にオーストラリア主導の「ソロモン諸島地域支援ミッション (Regional Assistance Mission to Solomon Islands: RAMSI)」がソロモン諸島国の治安回復と国家再建のために当地へ駐留を開始して以来、武力を伴う衝突は影を潜めている。しかし、首都ホニアラおよび首都を抱えるガダルカナル島内においては、民族間の緊張状態が続いているのが現状である。

本研究では、いまだ社会不安が広がっている「民族紛争」後のソロモン諸島を対象に、当地で暮らす人びとがどのように関係修復し、平和を構築しようと試みているのかを調査した。その際、「エスニック・テンション」について独自の調査を進めているソロモン諸島真実和解委員会 (Solomon Islands Truth and Reconciliation Commission: SITRC) の活動に注目し、インタビューおよび参与観察を行なった。また、いわゆる「伝統的な」関係修復の方法について調査するべく、ガダルカナル島北岸部ガオバタ (Ghaobata) 地区<sup>2)</sup>に位置するいくつかの集落を対象に、参与観察とインタビュー調査を行なった。

- \* 調査地 : ソロモン諸島国 (特に首都ホニアラ、ガダルカナル島北岸部)
- \* 調査期間 : 2011年7月9日から12月24日までのうち168日間
- \* 調査方法 : 文献収集および参与観察、インタビュー (ピジン語、ラウ語、レンゴ語)<sup>3)</sup>

キーワード : ソロモン諸島、「エスニック・テンション」、真実和解委員会、民族間関係、コンセンション

\* \* \*

## 1. ソロモン諸島真実和解委員会

ソロモン諸島国では、南アフリカ共和国をモデルとする真実和解委員会 (Truth and Reconciliation Commission)<sup>4)</sup>が立ち上げられた (2008年に法案が議会を通過、2009年に組織・活動を開始)。首都ホニアラに事務所を構える SITRC は、国内各地でワークショップや公開・非公開のヒアリングを重ねて「エスニック・テンション」の根本原因およびその経過を追究している。同時に、「エスニック・テンション」の当事者たち (直接・間接に紛争へ加担した者たちと、直接・間接に紛争から被害を受けた者たち) の間に和解を実現しようと試みている。本調査

<sup>1)</sup> 「民族間」という表現が適切でなく、「エスニック・テンション」の被害/加害関係が多様かつ重層的であることは、前回調査 (採択課題「ソロモン諸島におけるコンフリクトの歴史人類学的研究」、本プログラム平成21年度調査助成) の成果で指摘した。しかし、依然として「民族間」という着眼点の有効性を持ち続けていると考えている。「民族間」のみの問題として全体を捉えることが問題なのである。

<sup>2)</sup> この地域は、「エスニック・テンション」時に激しい武力衝突がみられた地域のひとつである (後述)。

<sup>3)</sup> ラウ語 (Lau) はマライタ島北部の一言語。レンゴ語 (Lengo) はガダルカナル島北岸部の一言語で、現地の人びとはドク (Doku) (語?) と呼ぶ。

<sup>4)</sup> 真実和解委員会については阿部利洋の研究および整理 [2007] を参照。

の主要な問題意識は後者の詳細を追うことであった。

SITRC が開催する国民公聴会 (National Public Hearing) への参加や国民葬サービス (National Funeral Service) での撮影記録係をはじめ、ホニアラの事務局 (本部、ガダルカナル州支部) に通い詰め、SITRC の日常的活動に参加観察した。これら SITRC の活動を追いかけることから、(1) SITRC の構成員が「エスニック・テンション」をどのように捉え、考えているのか、そして (2) SITRC の活動に対するソロモン諸島民の反応がどのようなものであるとして SITRC に受け止められているのかなどが明らかになった。

## 2. ガダルカナル島北岸部の調査

ガダルカナル島北岸部ガオバタ地区にはガダルカナル平原アブラヤシ会社 (Guadalcanal Plains Palm Oil Ltd.: GPPOL)<sup>5)</sup> が広大な敷地と膨大な労働力をもって操業している。そこでは、かつて多くの他島出身者 (主にマライタ島) が労働者として暮らしていた<sup>6)</sup>。他島民 (特にマライタ島出身者) をガダルカナル島内から排斥することがガダルカナル側の武装勢力にとって初期の目標であった「エスニック・テンション」に際して、ガオバタ地区では激しい武力衝突と陣取り合戦<sup>7)</sup> がみられた。

ガオバタ地区に位置するいくつかの集落に身を寄せて聞き取り調査を行なうことから、どういう立場にある人間が、どのようにして「エスニック・テンション」へと積極的に関与し、どのような活動を行なっていたのかが明らかとなった<sup>8)</sup>。また、「エスニック・テンション」に関与しなかった人びとが口にする「ブッシュへ逃げた (*Sipu i pono*)」という表現から、具体的にどのような逃げ方をしたのか、そこでどのような生活を組み立てていたのかが明らかとなった。

さらに、ガダルカナル島における「伝統的な」関係修復の方法についても調査を行なった。どのような問題が関係の悪化を招くとみなされているのか。その多くは、母系・女系を特徴とするガダルカナル島の親族関係をめぐるものであった (母方親族に対する悪口 [*Bosa thagata* (=悪く言う、の意)]、正式な手続きを踏まない妊娠や姦通 [*Vilavi* (=連れ去る、の意) や、*Pisu kinbo* (=花や実を摘み取る、の意)]。それぞれの問題によってどのような財を用いてどのような手続きを踏むことで関係を修復するのか。それは、スープ (*Supu*) と呼ばれる山盛りの食料や、ドヴ (*Dovu*) と呼ばれる 9 種の貝貨の組み合わせ (あるいは 9 種の貝貨セット) を提供することによって為されること、問題に応じて *Pono ti kuli* (=耳を塞ぐ) や *Doku lio* (=良い首/頭部) などと呼ばれることがわかった。

## 参考文献

阿部 利洋

2007 『紛争後社会と向き合う——南アフリカ真実和解委員会』京都: 京都大学学術出版会。

<sup>5)</sup> かつてのソロモン諸島プランテーション会社 (Solomon Islands Plantation Ltd.: SIPL)。「エスニック・テンション」をきっかけに閉鎖した。

<sup>6)</sup> ガダルカナル島北岸部のみマライタ島出身者が多く暮らしていたかのように受け取られるかもしれないが、厳密にはソロモン諸島国全域でみられた現象であった。

<sup>7)</sup> 「陣取り合戦」と表現する理由は、ガオバタ地区においてガダルカナル側の武装勢力とホニアラに暮らすマライタ島出身者から組織された武装勢力とが対峙し、検問を設置していたことと、その検問が「エスニック・テンション」の展開に伴って場所を移したことによる。

<sup>8)</sup> 資料の取り扱いの困難と紙幅制限により、本稿では曖昧な表現となることを了承いただきたい。